
おやすみday ~ 姫は俺のキスで目覚める ~

彩瀬姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おやすみday姫は俺のキスで目覚める

【Nコード】

N9006G

【作者名】

彩瀬姫

【あらすじ】

恋人同士の大翔と響。大翔の部屋にきた響が、突然大翔の肩に寄り掛かって寝てしまう。大翔は前に言っていた響のある言葉を思い出して、それを実行してしまうわけですが……。響×大翔シリーズ」
第4弾！！

(前書き)

ボーイズラブです。苦手な方はご注意ください。

「おい、響。ちょっとくすぐりたい……」

「うくん大翔……眠い……」

俺 大翔の部屋のベッドに座ったところ、俺の恋人 響は俺の肩に寄り掛かって寝ようとする。

それがとてもくすぐったくって嫌だと言うのだが、響は眠いと言つて眠り込んでしまいそうだ。

「響……」

困った……。

「すう……すう……」

ついに響は寝てしまった。5月はとても過ごしやすい気候なので、眠くなりやすいのだろうけど……。

なんで俺の肩に寄り掛かりながら寝てるんだ。

可愛い奴め……。

寝息を立てて、気持ちよさそうに寝ている。それがとても初々しい。

幼い顔立ちと言うと響は怒るけど、本当に可愛らしい。ほっぺがふわふわしていてとても気持ちいいし、小さな唇は綺麗なピンク色に染まっていて……。

すっかりへんな妄想をしてしまいそうになり、響から目を逸らした。

「はあ……」

響と出会って何度溜息をこぼしただろうか？

嫌な溜息じゃなく。呆れた溜息でもない。疲れてふとつく溜息でもなく。

甘く甘く気持ちのいい溜息。

嬉しくて嬉しくて堪らない。

響が我儘を言うたびに、ちょっと嫌な顔を見せるけど、それはも

ちろん本心ではない。

我が儘ってこんなにも嬉しいものだなんて知らなかった。

「こうしてほしい」「絶対そうじゃなきゃ嫌っっ」

それは俺の気を許していると分かるから、響が俺を好きって言う証拠だから。

「響……」

逸らした目を響に元に戻し、響の名前を呟く。その本人は起きることなく、寝ている。

「響」

今度は彼の耳元で名前を囁くが、それでも起きない。

『知ってる？お姫様は王子様のキスで目覚めるんだよ？』

突然の前に言っていた響の言葉が頭に浮かぶ。

なんて可愛いしいことを言うんだろっ。高校生男子の発言だとは思えない。今時の男子が、白雪姫にするキスを信じているのだろうか？

と、思うのだが、響ならあり得る話だった。

本当にキスで起きるものなのか？とちよっとした好奇心で。

……なんかちよっといつもと違う。

いつもキスするときは響は起きていて、「してしてっ」とせがんできてやるっということが多い。

自分からすることもあるが、響で起きていないと気にするなんて初めてだった。

響の唇に自分のそれを重ねようとする。

唇が重なった瞬間、響のカラダがピクッと跳ねた。

「……っっ」

ちよっと思とした目がとてもキュンときた。

「……大翔お……？」

目を擦りながら起きる響。その仕草が、とても子供っぽい。

「うん？」

「何か……よく寝た」

その言葉に俺は苦笑する。響が寝ていたのは、ほんの数分。よく寝たという時間にはほど遠いものだ。

それでも、そう言ってくれたことは幸せを感じる。俺の口付けで目覚めて、そしてよく寝たと言ってくれる。

「そうか……喉乾いていないか？」

少しの時間と言っても寝ると喉が渴く。

だから水を持ってこようかと訊ねると、なぜか響は恥ずかしそうに下を向きながら、小さく頷いた。響は寄り掛かっていたカラダを俺から離す。

俺は台所に行って、冷蔵庫からミネラルウォーターを出す。

部屋に戻ると、響はまだ下を向いていて、俺の顔を見ようとしな
い。

「どうかしたのか？響」

いつもと様子が違う響。

どうしたのだろうか？

「あのね……ちょっとお願いがあるんだけど……」

ぼそぼそと離す声は少し聞きとりにくいけどなんとか聞きとれた。
た。

「うん？何だ？」

「それがそのお……」

もしかして『そっち』のお願いなのか？

前にどうしてしてくれないの？と訊かれたことがある。それは俺が響を怖がらせたくないから、ちょっと待ってくれと頼んだのだ。

それに響の限界が来たのか？

不安に想っていると、響は恥ずかしそうに小さく言った。

「口移しで水、飲ませてえ……？」

……。

数秒の沈黙。俺は言ってることがよく分からなくて固まっていた

わけだが、響はそれを違う意味に履き違えたらしい。

「う、ごめんつ。引いた？」

慌てて謝る響。

どうやら、俺が引いたの思っているらしい。

「違う。ちよっと驚いたただけだ」

「それを引くって言うんだよ……」

俺の一言が、余計に響を落ち込ませてしまったみたいだ。

どうして俺は、響を落ち込ませる事ばかり言ってしまうんだろう？

口下手くちへたなのは、俺自身よく分かっている。

響はいつも俺を喜ばせてくれるのに……どうして俺は……。口下手な俺が恨めしくなる。

「響。ごめんな。俺、口下手で……。その俺どうゆう風に言っていないからなんだ。どうすれば響を喜ばせる分らない」

情けない事、言ったと思う。でも、もう聞くしか方法が分からなかった。

響を喜ばせることができるなら、かつこ悪くても……。

「それでいいよ。本心を言ってくれるのが一番僕にとって嬉しいこと。ただ、僕が我儘を言いつぎるだけ……。大翔が困っていたの気付かなかった僕の方こそ、ごめんなさい……」

「違う。響違うんだ。俺その実は……」

響の涙目を見ていたら、自分の本当の気持ちが見えた。

響を怖がらせたくない。そう言ってきたけど、あつてると言えばあつてるけど、少し違っていたことに。

本当は、自分が怖かったんだ。

「独占欲が強い俺を、響に嫌われるかもしれないと思ったのが怖かったんだ」

すんなりと言ったように聞こえるかもしれないが、此れでも心臓がバクバクとしている。

「そんなことないよ？僕、そんなことで大翔を嫌いになるなんてないからねっつ！……逆に大翔がそう言ってくれるの嬉しい……」

やっぱり、響は俺に嬉しい事ばかり言ってくれる。

「じゃあ、響。口を開けて？」

甘く囁くと、響の顔がポツと赤く染まる。響は目を瞑って、口をゆっくりと開ける。

俺は持ってきたミネラルウォーターを口に含んで、そのまま響の口に運ぶ。

唇をうつつすらと開けた響の口の中にミネラルウォーターを流す。

ちよつと違う感覚で、ひんやりとしたキス。

気持ち良くて、俺の口の中にミネラルウォーターがなくなっても、ずつと唇を重ねていた。

「んんっ…ふうんっっ」

息苦しくなったのか、響は俺の背中を叩く。

ゆっくりと重なっていたそれを離すと響は大きく息をする。

「苦しかったか？」

嬉しいそくに響は首を横振る。

「ううんっっ。もう一回やってほしい……ダメ？」

「仰せのままに」

そして、俺はミネラルウォーターを口に含んで響にキスをする。病みつきになりそうなくらいひんやりとしたキスは気持ち良くて……。

一日中、俺達は冷たいキスを繰り返していた。

冷たいキスで起きるのは、俺だけの可愛いお姫様。

(後書き)

こんにちは。彩瀬姫です。

題名からベタな気がしましたが、あまあまな二人如何だったでしょうか？

私的には、ラブラブな二人を書けて楽しかったです！！
来月も頑張りますので、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9006g/>

おやすみday～姫は俺のキスで目覚める～

2010年10月8日15時45分発行